

---

# 世界の悪意を打ち破れ！

ギャン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世界の悪意を打ち破れ！

### 【Nコード】

N2999J

### 【作者名】

ギャン

### 【あらすじ】

少年は、世界がなくなることを見ていた。そして無為な日々を送っていた。

ある日。世界には誰もいなくなっていた。現れた少女。

『本当の』世界が、動き出す。

## 1話（前書き）

更新不定期、駄文文章ですが、よかったら見てやってください。

## 1話

少年は、疲れていた。クラスメイトとの意味のない付き合いに。両親の毎日のように繰り返される諍いに。毎日、決まった時間に起きて一人で朝食を食べ家を出る。決まった時間に帰ってきて夕食を食べ風呂に入って、寝る。そんな変化の何一つない毎日に。

だから、だろうか。いつのまにか、「こんな世界はなくなってしまえばいい」と思っていたのは。そんな妄想に耽っている間は、なにをしてもどんな場所でも楽しかった。クラスメイトたちは、怪訝な目で彼を見て、ひそひそと話をしながら通り過ぎていく。両親は恐ろしいようなものを見るような目で見つめてくる。しかし、言葉を投げかけることもなければそんな息子の行いを咎めようともしなかった。「そんなこと」に構っていられるほど余裕はなかったのだ。「どちらが息子を引き取るか」という争いはいつのまにか「どちらに息子を押し付けるか」という話に変わっていた。そんな両親の様子に、少年はまた疲労した。

そんなある日のこと。変化が訪れた。

朝、自室のベッドの上で目が覚めた少年は、代わり映えしない毎日に飽き飽きしながらも無為な一日を送るために制服に着替える。階下に降り、リビングに顔を出す。食パンを焼きマーガリンをつけて食べる。冷蔵庫に卵とハムがあっただのでハムエッグにして食べる。それだけの簡易な朝食を済ませ、玄関へ。

いつも父、母、自分の順に規則正しく並んでいた靴が自分の分しかなかった。

「でかけたのか・・・」

なんら疑問には思わなかった。いた所でいないのと何も変わらない。靴を履き、静かに家を出た。

家を出て数分。大きな屋敷が見えてきた。そこには、いつもけたたましく吠える犬がいる。それだけならまだしも、門の前にはいつも「いつてらっしゃい」と声を掛けてくる老婆がいる。毎日、精一杯の営業スマイルで「いつてきます」と声を返す。それが、少年には苦痛で仕方がなかった。

しかし今日は違った。屋敷の前についても誰もいない。犬の声も聞こえない。感じるのは降り注ぐ日差しと撫でるようにやさしく吹いている風と靴越しにコンクリートを踏みしめる感触だけだ。そういえば、今日は誰とも会っていない。会ったところで挨拶など交わしはしない。会釈ですら稀だが、それでも毎日誰かしらとすれ違うものだ。狭い道を、体すれすれで通り過ぎていく車の姿もない。塀の上を身軽に、優雅に歩く猫の姿もない。

しかし、それぐらいの変化はあるものだろう。少年はそう思った。毎日、寸分違わぬ時間にバスは訪れない。電車だって、新幹線だって。時刻表はあれどタイムラグはあるだろう。なら、こんな偶然もあるに違いない。少年は面倒くさい習慣になってしまった出来事を回避できたことに嬉しくなり、少し上機嫌になりながら学校へと向かった。

さすがに、異常を無視できなくなったのはそれからすぐのことだった。

学校。門は閉ざされ、人気の全くない校舎前。いつもは登校時間ということもあり、カップルや、走りながら下駄箱に走るもの、ゆっくりと談笑しながら歩いている女子、朝部活終わりのジャージ姿の運動部員など、たくさん人間がいるはずだ。少なくとも、前後10分、その光景は続いているはずだ。予鈴開始まで、まだ15分以上ある。何が起きたのか。

門を飛び越え、玄関扉の前に来た。もしかしたら、なにか張り紙が張つてあるかもしれない。それなら連絡網で回せばいいのにも思ったが、家に電話が来るわけがないかとも思った。誰とも話したことがない。仕方なく、用事があつてということなら何度かあつたが、それ以外では、全くない。ガラス張りの扉には一枚の紙が張つてあつた。

「外から戻つたら、手洗いとうがいをしましょう」

このような内容だつた。少年は張り紙を破り捨てた。今日は何かわからないが休校なのだ。そうだ、そうに違いない。一向に人の姿はない。一人だけ来てしまった自分は馬鹿みたいではないか。家路につこうと引き返す。再び門を飛び越え今来た道を逆に辿る。

少年は今になつてようやく到つた。「ここ」は、「今」は、自分の望みが叶つた世界なのではないか。しかし、と思ひ直す。「世界がなくなつてしまえばいい」と、そう思っていた。それは、自分と  
言う存在もるとも、という意味だ。いわば、リセット。

なのになぜ自分はあるのか。確かに、なくなつてしまつたも同意だ。何も無い。全て残つてはいるが、「本当に欲しかったもの」が全部なくなつてしまつた。意味がなくなれば、消えたも同じ。

ちよつと待て。「本当に欲しかったもの」って何だ？自分には何もなかつた。欲しいとも思わなかつたからだ。いらなかつたから。手に入れようともしなかつた。なのに、さっきから感じる胸の痛みはなんだろう。何も無いのに。空っぽだから、痛みを感じる理由などないはずなのに。

「あなたは、さみしかつたんじゃないの？」

後ろから掛けられた声。バツと、すばやく振り返る。そこにいたの

は、少女だった。

小さい背丈に、全体的に細いスタイル。150行ってるか行っていないかぐらい。その背丈に不似合いな大きい男物のシャツを着ている。隠れるところは隠れているものの、スツと引き締まった足が見えてしまっている。

「誰だよ、お前・・・なにを言ってるんだ」

少女は、輝きを放っていない瞳を少年に向けている。口調は実に平坦。しかし、その様子は少年になによりも威圧感を与えていた。

「誰がさみしいって？ 僕はずっと前から世界がなくなればいいって思ってたんだ。ちょうどいい。僕の望んだ世界だよ、ここはっ！」

自然と、言葉が増える。それはきつと・・・

「焦っているの？ 本音を付かれて。あなたのせいよ、こんな世界になったのは。この世界を直せるのもあなただ・・・」

「うるさいっつ！！！！！」

少年は、力の限り叫んだ。喉が、今までにかかったことのない負荷に耐えられない。しかし、叫ばずにはいられなかった。

「この世界は僕の望んだ世界だ、いいよ、僕のせいでもっ！！ 誰が直すか、僕はずっと一人がよかつたんだ。一人が・・・二人でも三人でもない、一人が・・・っ・・・」

幼いころの記憶。両親は仲がよかった。家では、毎日朝も夜も一緒に食べた。家に帰ってくるのが遅かったお父さんを、お母さんと一緒に待った。一緒にお風呂に入った。仕事が休みの日は、遊園地に行った。水族館にも行った。でも一番嬉しかったのは少し遠くの公園に車でみんなでピクニックに行ったこと。

お母さんの作ってくれたお弁当をみんなで食べる。タコさんウインナーに、卵焼き。いろんな具が入ったおにぎり。他にもからあげ、ハンバーグとプチトマト。梅干入りのおにぎりを食べて苦しむ僕を見て、お父さんとお母さんは笑っていた。笑わないでも思ったけど、僕もつられて笑っていた。そして水を差し出してくれたお母さんに、ちよつとだけ怒った顔を向けて。そうするとまた笑う。そんな時間が楽しくて。いつまでも続くと思っていた。そう、ずっと終わることはないと思っていた……

「一人でいいんだ・・・人と挨拶を交わすことが面倒くさい、会話することが面倒くさい、顔色を見るのが面倒くさい、なのに、世界は僕の周りに人間を置いていて。だから、やっと楽になれたよ。もう誰とも係わらなくて済むんだ、清々したよ」

「そう。あなたは、正直者ね。気づいていないの？あなたの顔も、体も、何もかもがこの世界を否定しているのに」

少女は、動じると言うことがない。淡々と、事実を述べるのみ。

「だけど、意地を張ってる。素直じゃないわね、口は。悲しそうな目をしている。目は口ほどにものをいうのよ。あなたのお友達、ご両親、何で消えたのか知りたくない？」

少年は、おとなしくなった。もう、無駄な意地は心の中で氷解して

いた。それよりも、大事なことがあったから。

「何で？ それは、僕が望んだから・・・じゃないのか。だから僕だけが残ってて・・・」

「あなた、自分が何様だと思ってるの？ そんなわけないでしょう。でも、なんらかの関係はあるかもね」

「どうすればわかるんだ。父さんと母さんがどこに行ったか。あんなについていけばわかるのか」

「そうね。でも、少し違うわ」

「なにが」

「私に出来るのは元に戻すだけ。だから、全てが元の鞘に戻るの。でもそれだけじゃない、かもしれない。私にも詳しいことはわからない」

なんと言った。元に戻る。でも、それだけじゃない。

いつのまにか、かつての世界を羨んでいた。あれほど、なくなってしまうばいいと思っていた世界を。

「それだけじゃない、ってのは・・・なんらかのリスクがあるってことか？」

「そう。ノーリスク、ハイリターンなんてうまい話はない。もしかしたら、今より酷いことになるかもしれない。それでも、っていうなら私が力になる。今のあなたなら、送ってあげてもいい」

少女が、手を差し出してきた。  
僕はどうすればいいのだろう。どうしたいのだろう。世界をやりなおす。それは、大いなる危険を孕んでいて。下手すればこの状態よりも酷いことになるという。それでも、この手を取れるのか。

脳の逡巡は一瞬。

あっという間に手を掴んでいた。

少女が満足そうに頷いた。目を閉じて、なにやら呪文を呟く。足元が輝き、少女の体も光りを放つ。世界が、色を変えていく。空間にヒビが入り、強い風が吹く。

「狭間ハザマ 蒼空ソラ」

「え？」

「私の名前。いろいろ不便だと思うから」

「あ……僕、西園寺サイオンジ 一人。カストよろしく……でいいのかな？」

「うん。よろしく」

この日。なくなればいいと思っていた世界は終わりを告げた。新しい世界は、きつと同じものだけど、全く違うものになるんだろう。そんな予感がしていた。

彼女の手の温もり。久々に感じた、温かさ。いつかの思い出。ゆっくりと目を閉じる。懐かしい匂いに、身を委ねながら。



## 2話

目を開くと、そこは天井だった。どうやら、僕の部屋に戻ってきているらしい。使い慣れた枕の感触にホツとしたのか、体の力が抜けていく。でも、繋いだ手のひらは力を緩めることはなかった。あの懐かしい感覚は何だったのだろうか。まあ、誰かと手を繋いだことなんて記憶にある中では最新のものでも保育園の頃なのだけれど。どれだけブランクだ。

手のひらを、繋いでいる。脇に、人の温かさを感じる。掛け布団の中を見てみる。

・・・・・・・・・・・・・・・・！！！！！！

声を上げなかった自分を褒めてあげたい。

あれは、夢だったのだろうか。まあ今はそんなことは関係なくて問題は、そのままの格好で少女が僕の隣に居たことだ。っていうか同じベッドで寝ている。接近どころじゃない。密着だ。

動転して、少女の顔を見ることが出来ない。じっと見つめてみると、少女の瞼が開かれた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

少女は何も放さない。ただ、目を開けている。何を見ているのだろう。何かを見ているようで、何も見ていない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・すう」

また瞼を閉じる。いや、寝ないでくれ。

ベッドから抜け出て体を伸ばす。カーテンから零れる陽射しに、顔を顰める。ベッドの上、二度寝に勤しむ彼女を見る。よく考えたら、これは傍から見たらすごい光景じゃないだろうか。見た目小学生（年齢不詳）を自分のベッドに連れ込む中学生。完全にアウトだ。反論の余地もない。

「かずちゃ〜ん」

扉をノックする音。時計を見る。いつも起きる時間よりもむしろ早いぐらいだ。そもそも最近誰かがこの部屋を訪ねてきたことなんてない。ベッドの上には、幼い、という印象しか抱けない少女。これは、やばい状況だ。どうする？ 解決策が思いつかない。とりあえず彼女を布団で隠して・・・

「入るわよ〜」

扉開けたー！ー！それならノックなんてしないでー！ー！

扉の先にいたのは、誰であろう、僕の母さんだった。ああ、ただでさえ最近は何がいいとは思えないのに。さぞかし軽蔑の視線を僕に向けることだろう。そして何も言わずに去っていくんだ。リビングに行ったらそんな母さんしかいなくて二人きりでもすごい空気の中で食事をするんだ。（食べるのは僕だけだけど） e t c e t c .

などとマイナス思考に脳をフル稼働させていると、母さんはクスツと小さく笑って僕に微笑んだ。あんな顔を見るのは久しぶりで、思わず涙が出そうになった。でも、それより前に、母さんは衝撃的な一言を残して行ってくれたから。

「仲良きことは美しいとは言うけど、もう二人とも年頃なんですからね。いくら兄妹とはいえ。はしたないわよ」

お母さんの態度と、この言葉と。なんとなくだけど、僕は理解した。ここは、僕の知ってる世界だけど、全く知らない世界なんだって。僕の部屋は変わっていないけど、いろいろと変わっていることがある。

あと、突っ込むのが遅れたけど。

・・・兄妹って、なに・・・

「で、なんでこうなっているんだ？」

今僕は、彼女と共に学校への道を歩いていた。誰かが僕の横を歩いている。久しぶりのことで、実に落ち着かない。周りの景色ばかり見ってしまう。先ほどの、そんな僕が小さく呟いた言葉。わかっているけど、つい口に出てしまう。

彼女は、懊悩している僕の隣でどう考えても大きすぎる制服の裾の部分をじっと見つめていた。いかにも着慣れていない。まあ、この世界の『設定』からすればそれでいいのかもしれない。

今日は、僕の通っている中学の入学式。といっても僕の、ではなく彼女「狭間 蒼空」のだ。だけど入学式は基本1年生とその親、あとは教職員で行われる。上級生との顔合わせは翌日、つまり明日の1年生歓迎会が初顔合わせになる。なので、本来僕と一緒に登校する必要はないのだが。母さんにも言われたし、僕自身も彼女が道をつわらないだろうと思って付いてきている。彼女はそんな僕らの横で朝食に出てきたお味噌汁を我関せず、といった風で啜っていたが、（そのとき僕は溢れる涙を必死で堪えながら鼻を啜っていた）

誰かと歩く道。なんだか新鮮だ。誰かがそばにいただけで、こんなにも暖かい。それとも、それは隣にいるのが彼女だから？そんなことを考えることが出来るくらい、頭に余裕が生まれてきた。当たり前前の疑問を、口にすることが出来るくらいには。

「なあ、なんでこんなことになってるんだ？」

自分と彼女を指差す。

「世界は元通り・・・いや、それ以上だけど。なんで君がいるの？しかも妹で、入学式だ、とかなんとかさ。意味わからないんだけど」

「言わなかった？ それだけじゃない、って。でも、さすがに・・・」

自分の服を掴んで、手を離れた。表情を伺うと、なにやら腑に落ちないといった感じ。

「これは異常かもしれない。私というイレギュラーがいるからある程度の変化は覚悟してたけど。もしかしたら・・・」

それっきり、彼女は黙ってしまった。表情が険しい。何があったのだろうか。異常がどうか。僕が考えても、何もわからない。わからないことだらけで、頭が痛い。彼女は「とにかく、あなたは今までと同じでいればいいわ」と言った。「いやでもあっちから近づいてくるだろうから」と。

何が近づいてくるのかは、聞けなかった。とりあえず毎日を通じて、僕は思った。

刻一刻と、近づいていたのだ。その「何か」は、そのことを、僕はまだ知らなかった。

学校に近づくにつれて、人の数が増えていく。誰もみんな真新しい制服を着ている。新たに始まる学校生活に、胸を躍らせて。いるんだろうなあ。僕と違って。

玄関先にあるガラス戸に張ってある張り紙。クラス編成が書かれている。蒼空と一緒に覗いて見る。1組、ない。2組・・・違う。

3組・・・お、あった。「1年3組 サイオンジ 西園寺 蒼空」

西園寺？ ああ。兄妹っていう設定だったか。

「3組だったさ。まあ、どうでもいいかもしれないけどさ」

「・・・・・・・・」

蒼空はクラス表をじっと見つめていた。まるで、何かを見通そうとするように。

「どうする？ っていうか、どうした？」

「このあと、どうすればいい。学校など行ったことがないからわからないのだが」

蒼空はどこか困ったように佇んでいる。こんな表情もするのか。何事にも動じないと思っていたけど。

「他の人たちについていけばいいと思う。教室が並んでるから、自分の教室に行けばいいよ。あとは黒板に書いてあると思うから」

「うん、わかった」

校舎の中に入っていく蒼空を眺めていると、後ろから肩を叩かれた。振り向くと、そこにいたのはうちの制服を着た女子生徒。動作と雰囲気から、活発な子なんだろうなあと思像がつく。

「なんですか？」

「君、あの子のお兄さん？ 私、アサクラ朝倉 ミサキ美咲。転校生なんだ」

馴れ馴れしい。よく言えば気兼ねしないと云うのか。それにしても何で僕なんかに話しかけているのか。他に人はいっぱいいるだろうに。

「そうですか。それじゃ」

「ちょっと待ちっ！！」

歩き出した僕の腕をガツと掴まれた。なかなか強い。僕の方では振りほどけないぐらいに。

「こんなに可愛い転校生が話しかけてきているんだよっ！？ フラグ立てるチャンスだ」とか思わないのっ！？」

自分で可愛いって言うな。あとフラグってなんだ。

「とにかく、校舎内の案内を所望するっ」

「ごめんなさい。それじゃ」

歯牙にもかけず、すたすたと歩きだ・・・

「待ちい!!」

・・・せなかつた。後ろから抱きつかれる。ああ、なんか当たってる感触にドキツとする自分が悔しい!!

「なんなんですか、いきなり! っていうか当たってる、からあああ」

「はあああああっ!?!?!」

バツと彼女は俺から身を離れた。顔が真っ赤になって体を両手でかき抱きながら震えている。

「ご、ごめんなさい!! いや、やってるときは必死だったけどいざ突っ込まれると恥ずかしいね・・・アハハ・・・」

いきなり殊勝な態度になった。そんな姿が可哀想に思えて、でもそれ以上に、なんて言ったらいいかわからないけど、心を奪われて。

思わず、優しくしてしまった。

「え〜と・・・朝倉さん、だっけ。行くんなら早く行く? 僕、早く帰りたいし」

人に優しくされた記憶なんて、ほとんどない。でも、誰かに優しくしたことはきつとなかった。これはきつと、気まぐれにも似た行為。

「え・・・うんっ」

それなのに、

「ありがとう」

歩き出す僕についてきた朝倉さんが、感謝の言葉なんて向けてくれるから、理解してしまった。

僕は、優しくされなかつたんじゃない。それに釣り合うだけの感謝を、してこなかつたから。

優しさに、麻痺していたんだ。当たり前の中にある優しさに、気づかなかつたんだ・・・

「どうしたの？」

いつの間にか追いついた朝倉さんが、僕の隣にきて、僕の顔を覗き込んでいた。

「な、なんでもないよ」

驚いて、ちょっと離れる。彼女はそんな僕に優しい笑顔を向けてきて。

「ありがとう。ありがとう。ありがとう!!」

背中をバンバンと叩かれた。

そんな何回も言われなくてもわかってるんだけど。

「な、なに？」

「別に。ただ言いたいただけっ!!」

元気に歩いていく彼女。そんな彼女の後姿。ゆっくりと追いかける僕。

この世界でならやっついていける。そんな気がした。

## 2話（後書き）

もうネタ切れ。ぶっちゃけ1話であたふた。

### 3話

朝倉さんと別れ、家に帰る。お母さんは今頃学校にいるだろうか。校舎内を案内するといつても、それほど大きくない。さほど時間を掛けずに校舎内を案内することが出来た。幸い校舎内は僕の知っているままだった。

「君ってさ、優しいね」

別れ際、彼女……朝倉さんが言った一言。僕が優しい、か。ただの気まぐれだったんだけど。

「ありがとう」

僕に、大切なことを思い出させてくれて。

「へ、何が？ 感謝するの私だよ？」

「別に。ただ言いたかっただけ」

そう。言いたいから、伝えたいから人は感謝の言葉を口にする。そこに難しい感情は必要なくて。シンプルな気持ちでいればいいんだ。

「ふん。ま、いいや。そういえば、君の名前はなんていうの？  
まだ聞いてなかったよね」

そうだったっけ？ ああ、馴れ馴れしすぎてこっちも既に自己紹介を済ましたつもりでいたよ。

「僕、西園寺サイオンジ 一人カスト。よろしく、朝倉アサクラ 美咲さんミサキ」

「うんつ。同じクラスになればいいね、明日のクラス編成」

「そつだね」

素直にそう思える。彼女の明るさに、僕はどこか救われた気がしていた。でも、いっしょにいればもっといろんなことがわかる気がする。

「じゃあね、西園寺くん!!!」

駆けて行く彼女の後姿を眺めて、心配になったことがあった。

パンツ、見えそつだよ……

鍵が掛かっていたので鞆の中に入っている鍵を取り出して……あれ、ないなあ。もう一回。鞆を地べたにおいて両手で鞆の中をかき回す。

やっぱりない。家の中に入れないじゃないか。引きこもり体質の僕には死刑宣告にも等しい。基本誰とも係わり合いたくないのだから。悩んでいても、どうしようもなくて。家の前で突っ立っているのも、それはそれでありだと思っけど。どうしよう。駅前に行かないとほとんど何も無いんだよなあ。ゲーセンとかは無駄にあるけど、ゲームとか普段やらないし。お母さんたちが帰ってくるのは大体昼過ぎ。腕時計を見る。現在時刻は10時過ぎ、といったところか。だいたい2時間ぐらい時間を潰さないといけない。

結局、家の近くの公園でボーっとして時間を潰すことにした。緩やかに流れる風とほとんど葉が散ってしまった桜の木を眺めながらブランコをゆっくりと漕いでいた。世界が静かに、まったりと流れてゆく。早く時間には経過して欲しいが、しかしこんなのも悪くない目を閉じて、全てを体全体で感じる。車のエンジン音や、自転車のブレーキ音、どこかの家庭の洗濯物をたたいている音。犬が吠えて、猫が啼いて。そんな雰囲気が、心地よかった。目を開けると、前に自転車が停めてあった。横から、ブランコを漕ぐ音が聞こえる。

「あゝしたてんきにな〜あれっ！」

中性的な声。隣のブランコに座った人から、靴が飛んで行った。しばらく漕ぎ続けていると、隣の人は靴を取りに、ブランコから降りた。

女性だった。黒い美しい髪。落ち着いた雰囲気の服に、似合っていた。ゆっくりとした動作で靴を取りに行く。まるで、どこかの姉さまのような。でも、目の前にある自転車は普通にママチャリだ。靴を拾うと、そのまま自転車に跨りどこかに去っていった。

何しにきたんだろうか。お金持ち（おそらく）の考えることはよくわからない。ブランコを止めて腕時計を見ると結構な時間。今から家に帰ればちょうどいいかな。傍らに置いた鞆を取りブランコから立ち上がる。公園の外に目を向けると、肩を怒らせて歩いている女の人があった。あれは、俺でも知っている。名前は忘れたけど、でも、教室じゃ僕の次におとなしいぐらいの女の子だったと思うんだけど。まあ、誰も見てないところでは人はわからないってことかななどと思っていたら、ズンズンと公園の方に歩いてきた。うわ〜、すごい目つき鋭い。なんか怒ってる・・・？

「ふん！〜！」

僕の座っていたブランコの隣のブランコに彼女は座った。体中から怒りのオーラを立ち昇らせながらブツブツと呟いていた。巻き込まれるのはごめんだ。そっつと公園のことへ歩いていく。

「なに!？」

思わず体が停止してしまった。気づかれないように振り返ると、じつと睨まれていた。

「なんか文句ある!??？」

何もないよ。っていつかそれ僕の台詞だよ。

「まったく・・・私の身にもなれっての」

だからそれは僕の台詞だよ。

「ああ、むかつく・・・!」

相手していられない。こんな人間を相手するスキルは僕にはない。歩きながら腕時計を見ると、もう母さんたちが帰ってきているだろう時間帯になっていた。後ろでさっきの子が喚いていたが気にしないことにした。

二人は既に帰ってきていた。っていつてもまた母さんは出かけたみたいだ。蒼空<sup>ソラ</sup>が一人で弁当を食べていた。視線をこちらに一瞬だけ向けて、またすぐ食べてる弁当に戻した。机の上に置いてあった弁当を取って、電子レンジに入れてスイッチを入れる。温め終わった

弁当をレンジから出してふたを開ける。からあげ弁当。家の近くの弁当屋さんはからあげの量が多い。ボリューム満点。食べ切れなくて残りが晩飯のおかずになる。一石二鳥。

「いただきます」

「ごちそうさま」

同じタイミングで蒼空が食べ終わる。空になった弁当箱を捨てると僕の目の前にきた。

「やっぱり、いたわ」

いきなり切り出された言葉。なんのことが、不思議とわかった。

「いるはずのなかった人。イレギュラーが。私のクラスに」

「そっか・・・あのさ。蒼空は、なんで世界を元の世界に帰そうと思ったの？ やっぱり、僕が可哀想だ・・・とか思ったの？」

「よくわからない。なんとなく」

「そっか・・・なんとなくか」

それ以上は、聞こうとは、気になったけど思わなかった。なら、いかなど。現実として僕はここにおいて、蒼空がいなければ僕はどうなっていたかわからなかったから。

「ありがとう。うん、ありがとう」

僕と、出会ってくれたことに。

「本当に、ありがとう」

この世界を、戻してくれたことに。

彼女は、「うん」と言って部屋を出て行った。口元がどこかにやけていたのは、僕の見間違いだっただのかな・・・？

## 4話

翌日。蒼空<sup>ソウクウ</sup>とはあの後夕飯まで顔をあわせなかった。こつちもどこか恥ずかしくなってしまうて、夕飯の時も蒼空の顔を見ることも出来なかった。それでそのまま今日に至る。現在、朝食時。母さんと蒼空と3人で食卓を囲む。トーストとハムエッグ。前から嫌って言うほど食べてきたメニューだけど、母さんが作ってくれたからおいしく感じる。今日は僕のクラス編成が発表される日だ。昨日出会った女子生徒、朝倉さんとは同じクラスになれるだろうか？少しだけそれを望んでいる僕がいた。

蒼空と一緒に家を出て、学校へ向かう。他愛ない話、とかができるといいのだろうが、口下手な僕と、必要なことはあまり言わない蒼空とはそう会話が出来ない。まあ、僕としては黙っているのは嫌いじゃないからいいのだが。

「なあ」

なんてことを思っていたら、蒼空が話しかけてきた。体の前で両手で持った鞆が大きく見える。それだけ蒼空が小さいってことが。

「昨日のは、どういう意味だ？」

昨日の？ なんのことが、わからない。

「別に、礼を言われるようなことはしていない。なのに・・・」

「意味なんてないよ」

今のところは思いつかない。でも、言っておきたかったから。伝え

ないと、感謝の気持ちはきつと伝わらないと思ったから。

「そう思ったから、なんとなくくさ。ここにいないと、大切なこと、きつとわからなかったから。だから、ありがとう。この言葉ってさ、言われるほうもだけど、言うほうも気もちいよな、ってさ。気づかせてくれたから。そう考えると、意味がないってわけじゃないのかな。ははっ」

こんなに多く喋ることなんて滅多にないので、恥ずかしくなってしまう。思わず照れ笑い。自分でも何を言いたいかわからない。

「……ありがとう、か」

ボソツと呟いた蒼空の表情には、どこか憂いが漂っていて。そういう状況をなんとかするスキルは僕にはないので、黙っていることしか出来なかった。

校門前までやってきた。すごい人だ。特に、昇降口付近に人が多い。昨日の1年生みたいにクラス分け表が貼ってあるんだろう。

「じゃ、僕上だから」

階段の前まで来て別れようとすると、急に腕を掴まれた。っていうか抱きつかれた。

「ちよ、何？」

蒼空は目の前を指差している。その方向に目を向けると、昨日校舎内を案内した女生徒、アサクラ朝倉 ミサキ美咲さんがいた。横に、うちの制服を着た女の子。蒼空と同じぐらいの身長だろうか。朝倉さんは、こっちに気づいたみたいで、手を上げながら近寄ってきた。

「やつほー、につしー。そちらは妹さんかな？」

「につしーって・・・」

「西園寺とかめんどくさいじゃん？ 謎の怪獣っばくてかつこいいよ」

ネツシー的な感じなんだろうか。というか心の声読まれた？

「たしか・・・そらちゃんだったよね。この子が迷惑掛けると思うけど、よろしくね」

朝倉さんに押し出されるようにして前に出てきた女の子。恥ずかしそうに、俯いていた。

「朝倉さん、その子は？」

「あたしの妹。ほら花<sup>ハナ</sup>。自己紹介」

花と呼ばれた子は、何度か口を開こうとするも、すべて失敗に終わってしまふ。そしてまた朝倉さんの後ろに隠れようとする。それを抑える朝倉さん。に対抗している花と呼ばれた子。それを眺める僕ら。

不毛な時間だ・・・と思っていたところ、朝倉さんは諦めたみたいで、はあ、とため息を一つついた後、

「あゝ、人見知りなんだこの子。いろいろとお願いします」

妹さんと一緒に頭を下げた。もちろん、こちらとしてもそれは願っ

でもないことで。

「こちらこそ。よろしく願います。って、蒼空？」

頭を下げた僕の腕に抱きついたまま、朝倉さんと妹さんを睨みつけていた。

「あんまり、歓迎されてない・・・かな？」

朝倉さんは気まずそうに苦笑していた。

「・・・うう・・・」

妹さんは今にも泣き出しそうだったけど。

「私たち、行くから・・・じゃね〜」

二人は先に校舎の方へ消えていった。

「どうしたの？　っていうか腕痛い・・・」

なんかデジャヴ。

蒼空は二人が消えていったほうをずっと見つめていた。

「あの二人・・・どっちも同じ」

「同じって何が？」

「私と同じ。いるはずのない、イレギュラー」

「え……?」

言われてみれば、わからなくもない、のかな。というか元の世界で見たこともあったこともないし。

「だから、気をつけたほうがいい。いつ寝首を搔かれるかわからない」

「そんなこと……」

ないんじゃないか。でも蒼空の顔は真剣そのもので。

「普通の人間は、私たちと同じことは出来ない。なのにここにいる。何か目的があるはず。なんでこの『軸』を選んだのか? それは私たちしか有り得ないと思う。油断は禁物。かならずどこかに歪がある」

「よくわからないけど、疑え……ってことなのか? でもそれは悪い気がするなあ」

「相手は悪気なんてない。機会が来ればあつという間にこっちに手を出してくる。そのときに何も備えをしていなければ、終わり」

「やだよ、ここにきて、人を信じるってことが少しだけど、分かるようになったんだ。なのに」

気づかせてくれたあの人を、疑えなんて。

そんなことは、出来そうにない。

「朝倉さんは疑えない。妹さんだって、どこどう見たって悪い人に

は見えないだろ？ 何より、今は人を疑いたくない。信じたい」

「甘い。そんなだと、また前みたいになる。裏切られてからじゃ遅いのに」

「裏切られない。裏切らないよ、あの二人は！ そんなことにはならない」

「わからないわね。あなたのことを心配してるのよ、私は」

「それはありがとう。でも今はいいよ。もうすぐホームルーム始まるから、先行くね」

強引に話を終わらせて、階段を昇り始める。中ほどで後ろを振り返ると、まだ蒼空が僕を見つめていた。

なんだかムシャクシャする。なんで僕は怒っているんだろう。別に僕が何かいわれたわけじゃないのに。そういえば。最近、まともに感情を出したことはなかった。前の、誰もいなかった世界で蒼空に痛いところを疲れたときぐらいか。怒ることにすらブランクがある。前の僕はどれだけ人間として空っぽだったんだろう。今の僕は、どうなんだろう。少しは人間らしさを取り戻せたんだろうか？

少女は、世界の意思に感謝した。記憶の奥隅に、ずっと大切にしまっていた幼少の頃の記憶。周りの人間がみんな何か得体の知れないものにばかり思えて、とても触れ合おうとは思わなかった。親ですらまともに話も出来ずに、いつも「臆病だなあ」と笑われていた。そんな少女の味方は世界で一人の妹だけだった。妹は誰ともうまく付き合った。普通は自分が妹を引っ張らなければいけないのだろう

が、この姉妹においては逆だった。いつも妹は笑っていた。そんな妹と一緒にいる人も笑っていた。それが少女が行くと、苦笑いに変わるのだ。それが少女は耐えられなかった。自分はいらないと、なんでここにいるかと。そんな時に、一人の少年と出会った。少年も、少女と同じぐらい根暗でいいところのない少年だった。でも、その少年との出会いは、少女を確実に変えた。ほんの1時間も一緒にいかなかったかもしれないが、そのわずかな時間に彼女がもらったものは非常に多くのものだった。それから間もなく少女は遠くの土地へと引越した。もう会えないと思っていた。

会えたのは、幸運以外の何物でもなかった。それも、規格外の方法で。だから、彼女はこの機会を逃したくない。昔からテレビで聞いてきたフレーズだが、彼女は絶対に信じない。

初恋は実らない、なんて絶対に――

少女は、世界の意思に感謝した。少女は姉が大好きだった。大好きな姉が辛そうな顔をしているのを、どうにも出来ずに眺めていた。ある日、姉が珍しく外から帰ってくると、姉が無邪気な笑顔を見せてくれた。それ以来、姉は人が代わったように明るくなった。何かあったのだろうか。でもそれが何かわからなかった。

「私、好きな人いるんだ」

そんなことを姉が言ったのはいつごろだったか。名前は知らない、どこに住んでいるかも知らない。それは、好きと言えるんだろうか？ 少女は恋などしたことなかったので分からなかったが。姉の、話をするときの恥ずかしそうだけど嬉しそうな顔を見て、嘘はついていないんだな、と思った。

昨日、久しぶりに姉の見せた表情を見て、「ああ、よかった」と思った。ビンゴだった、と。

きつと姉はこれから楽しい毎日を送っていくのだろう。いろいろ苦勞はするかもしれないが、自分自身は不安がたくさんあった。射すくめられるような視線を感じた。クラスの誰とも話はしなかったけど、その視線を向けてきた少女の名前だけは覚えた。苦勞するのは私だけだったらしい。だけど、姉に何かあつたら絶対に許さない。

私の望みはただ一つ。姉の望みが叶うことだけ。趣味で読む小説にはよくこんなことが書かれていたが、彼女は嘘だと信じて疑わない。

初恋は実らない、など……

#### 4話（後書き）

- ・ 蒼空のキャラが安定しない。わかってるよ、わかってるよ、わかってるんだけど・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2999j/>

---

世界の悪意を打ち破れ！

2011年1月28日14時07分発行